

定家
難波めがなみまがしはをとるほどに日もくれ袖に月ぞやどれる

貽介いけい右十八

あこやとるい貝のからをつみおきて寶のあとを見するなりけり

〔延喜式二十一〕祥瑞略○中

大貝貝自海出其大 右上瑞

〔倭名類聚抄十九〕殼音角和名 唐韻云殼音角和名 虫之皮甲也崔禹錫食經云河貝子其殼上黑是

〔類聚名義抄九〕殼カヒ

〔貝盡浦之錦上〕空背介左八 百貝圖には甲貝と云又へなだりと云

螺類略○中 古來歌書の説にはすべて肉のなきをうつせ介と云まじ見えたりまづ此前歌仙に入

はつべた介也もろこしにて貝光又は光螺と云ものなり

〔萬葉集十一〕寄物陳思古今相聞往來歌

住吉之濱爾縁云打背具實無言以余將戀ハチ

〔冠辭考二〕うつせがひ みなきこともて○中略

こは虚になりたる石花貝の身無をもて實なき言にいひかけたり○中 集中に石花と書て勢

とよめり此せがひのうつらになりたるを虚石花貝とはいふべし○註

〔いほぬしぞこ〕熊野有馬浦にかひひるふとて袖のぬれければ

ふぢ衣なきさによするうつせ貝ひらふたもとはかつぞぬれける

○按ズルニ貝殻ヲ貝合ニ用キル事ハ遊戯部物合篇貝合條ニ載セタリ

〔本草和名十六〕甲香一名流螺最美且香出 和名阿岐乃布多

〔倭名類聚抄十九〕角蓋 本草云甲羸子中有角蓋和名都比 蓋上錯似鮫魚皮者也

貝蓋

貝殼

瑞貝